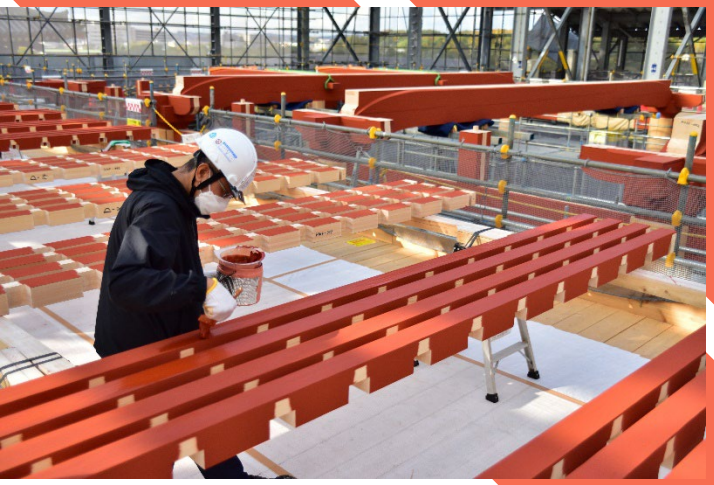
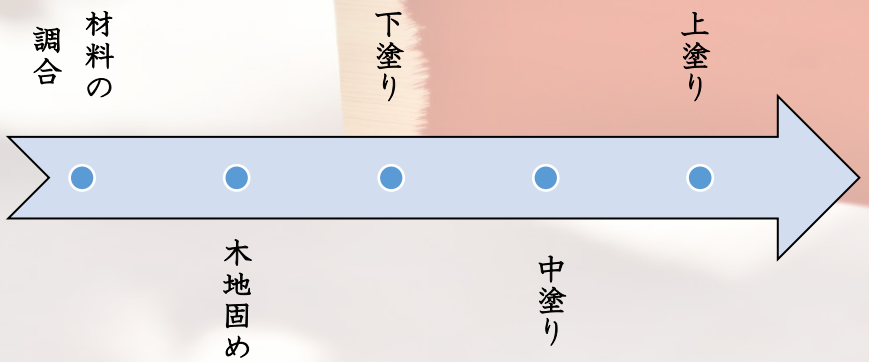


「第一次大極殿院東楼復原整備工事」を支える職人の方々の紹介

～塗装編～

伝統技能の紹介

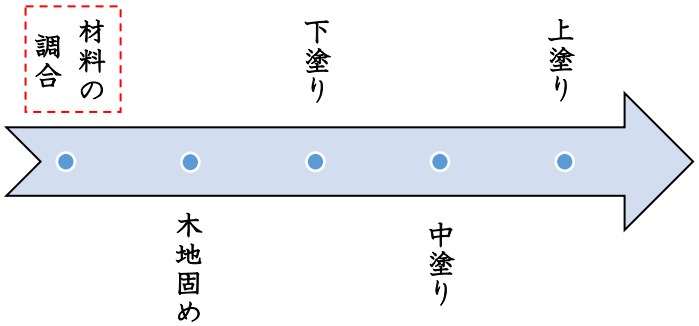
塗装工事の工程

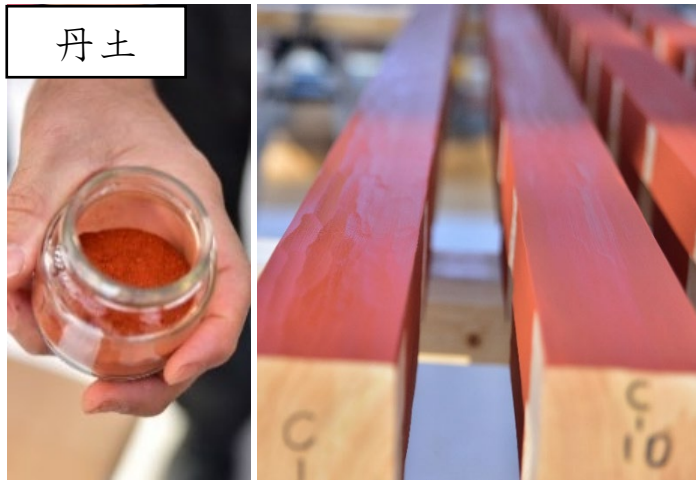


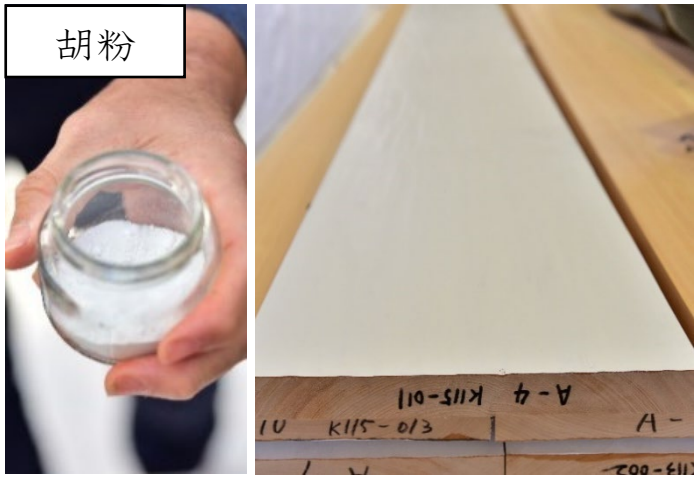
塗装とは

　塗装とは建物の保護や美観などを目的に屋根や壁、床などの材料に塗料を塗る（皮膜を構成）ことです。
塗装の歴史は長く、昔から変わらない材料と方法が現代まで受け継がれ、その技術が東楼復原整備工事にも活用されています。

塗装工事の工程







東楼では、材料となる塗料を現場で一から調合・管理をしています。

（使用する材料）
膠（にかわ）：塗料に対する接着剤
　　動物性タンパク質で動物の皮や骨を煮込んだもの

丹土（につち）：酸化鉄を主成分とする赤色顔料
胡粉（ごふん）：貝殻といったカルシウムが主成分の白色顔料

　顔料の胡粉は塗ると剥がれやすいため、胡粉全体に膠がいきわたるように百叩き（百回以上叩く工程）により練りこんでいます。また、加えた水の分だけ弱くなるため、膠を含んだ塗料を塗った後、長時間かけて水分をじわじわ飛ばして乾燥させていきます。

　東楼に携わる塗装職人たちは、塗装にどんな魅力を感じ、どんなことを意識しているのか、また、東楼ならではの苦労や東楼に携われることについてどう感じているのか、取材して参りました。

これまで平城宮跡の大極殿院（南門）や首里城に携わってきた28年目の山口さん。普段は寺社の塗装を行っています。東楼では木材への丹土や胡粉塗りを担当しています。山口さんには塗装の魅力、これまでの苦労、東楼に対する思いを語ってもらいました。

三宅塗装

山口（やまぐち） 麗（れい）さん

経験年数28年

考えて色を作れる楽しさ

東楼のような工事の塗装では、材料作りから始まります。（使用する）材料の性質を考え色を作る工程は魅力的です。それに加えて、塗る時のことも考え、木材の表面の具合や塗料の吸い込み具合といろいろと考えなければならず、職人の腕が試されることも魅力です。

もっと上手くなりたい

私が行う仕事に対して「もっと上手くなりたい」と常に考えており、自分の仕事に納得したら終わりだと思っています。自分が担当した仕事が終わり、携わった建物が完成して良いものに仕上がったとしても「もっと他に何かできたのではないか」と常に自分に問いかけることで、新しい発見や課題が見つかり、その発見や課題が成長するきっかけとなります。

刷毛（はけ）を使いこなせずに苦労

私が仕事を始めた頃は、塗るために使用する刷毛を使いこなせずに苦労しました。建築の塗装の仕事に携わる前には仏像修復の彩色をしており、彩色だと筆を使用し建築の塗装だと刷毛と道具が変わるので、扱いが全く異なりました。初めて熟練技術を間近で見たときは、「何でその動きができるのか」と思っていました。直接先輩に教わったり、手元を見て勉強したりの日々を重ね、今では大きな仕事を任せられるようにまでなりました。

後世に残ることが誇り

現在担当している東楼の塗装作業では、大極殿院（南門）と同様に脚立に材を並べて塗る「置き塗り」をしていますが、この塗り方をするのは珍しい。私は南門の復原工事にも携わっていましたのでその当時の経験が今の東楼にも使うことができます。自分が手掛けたものが後世に残っていくことはすごく誇りに思います。

20歳の時にアルバイトで塗装の仕事に関わりこの世界に興味をもった33年目の松井さん。30年以上続けられるモチベーションは一つのことを追求していく性格だからと言います。東楼では塗装作業や材料の管理を行っています。松井さんに塗装の魅力、これまでの苦労、東楼に対する思いを語ってもらいました。

三宅塗装

松井（まつい） 秀仲（ひでなか）さん

経験年数33年

塗り方に正解はない

塗装の魅力は塗り方に正解がなく、常に創意工夫ができることです。最近はローラーで塗装することが多く、刷毛で塗ることが減ってしまいましたが、社寺建築では刷毛を使って塗っています。東楼のように表面が槍鉋で仕上げられた面（平滑でなく凸凹のある仕上げ面）を塗装する場合では、表面に凹凸があるためローラーで塗ることが難しく、刷毛で塗らなければ綺麗に仕上げることができません。

刷毛（はけ）を使用する上での苦労

大きくて長い部材を塗る時に時間をかけてしまうと刷毛の継ぎ目が出てしまう。そのため、上部、真ん中、下部に分けてお互いに意識しながら3人で塗る工夫が必要になります。このように塗装はその時々で塗り方が異なり分担して塗るなど、部材の大きさと形ごとに効率的で綺麗に仕上げるように創意工夫しながら塗る必要があります。会社に入ったばかりの時は刷毛を使いこなせず、苦労はありましたが、日々創意工夫し東楼のような大きな仕事に携われるまでになりました。

綺麗に長く残り続ける古来の塗装

現在、担当している東楼では膠を混ぜた古来からの工法で仕上げています。この塗装は時間がたっても変色せず綺麗に長く残り続けるといった特徴があります。今では使われることが少ない工法ですが、東楼を通して伝統技術を繋ぎ、今後何十年と残っていくことに誇りを感じています。

父親の跡を継ぐために塗装の業界に足を踏み入れた社長の三宅さん。東楼では塗装仕上げの品質管理を行っています。三宅さんには職人の成長への想いを中心に塗装魅力、これまでの苦労、東楼に対する思いを語ってもらいました。

三宅塗装

三宅（みやけ） 剛（ごう）さん

経験年数35年

何故そのようにできるのかを考える

普通の人は塗料をつけた刷毛を持つとポタポタ垂れ落ち、作業後には全身塗料で汚れてしまいます。しかし上手い人は塗料を垂らさずに刷毛を持ち上げて運び、天井にも塗ることができます。「何故そのようにできるのか」と見て考えているうちに、興味がわき塗装の面白さを感じるようになりました。

ナライチの動作をひたすら見た

私が若い頃、塗装職人であった父親や会社にいたナライチ（奈良で一番）と呼ばれている人が周りにいました。彼らは早くてきれいに塗れて、さらに仕事の手配の仕方にも長けていました。初めにそのような簡単に追いつけない職人を身近で見られたのが、向上心にもつながったと思います。差を縮めるためには、ひたすらその人の動作を見ました。

言うだけでは伝えきれない

現在は社長として、職人の塗っている様子や会話も交えながら正しい状態で塗れているかを確認しています。管理する立場では教育も大切で常にどうすべきかを考えさせられます。言うだけでは職人の世界の細かいところはどうしても伝えきれない。自分で気づいてもらわないといけません。ある程度のところまでは言い、仕向けて気づかせるようにしています。職人の成長を信頼して任せるようにしています。

長期プロジェクトに対する思い

平城宮跡・復原のような伝統木造は、貴重な機会であり、長期のプロジェクトでもあるため責任を感じます。復原工事は過去にも経験していますが、各々で形状や規模が違っており、東楼の工事は職人にとっては貴重な経験であり出来上がりが楽しみです。

復原工事を支える職人達

会社名	フリガナ 氏名
三宅塗装店	ミヤケ　ゴウ 三宅　剛
三宅塗装店	マツイ　ヒデナカ 松井　秀仲
三宅塗装店	ヤマグチ　レイ 山口　麗
三宅塗装店	トガワ　カズキ 登川　和樹

「第一次大極殿院東楼復原整備工事」
は多くの職人に支えられて
整備されています。